

レポート活動を中心とした 「総合日本語 5」および「総合日本語 6」の課題 —学習者の振り返りの分析から—

徳間 晴美・伊藤 奈津美

キーワード：総合科目群，総合日本語 5，総合日本語 6，レポート活動，学習者の振り返り

1. はじめに

本稿では，早稲田大学日本語教育研究センター（Center for Japanese Language：以下，CJL）で開講されている「総合日本語 5」および「総合日本語 6」科目の課題について検討し，今回行った調査で捉えられた問題点とその後の取り組みについて報告する。

CJL は特徴を持つ多くの日本語科目を設置しているが，筆者らは，両科目が四技能をバランスよく学習することを目指す「総合科目群」に位置しているにもかかわらず，レポート活動にかける時間が多く，偏りがあるのではないかという点について問題意識を抱いていた。そこで，両科目のコーディネーターとして，学習者はこの点についてどのように感じているかを把握する必要があると考え，学期末に調査を実施した。以下，2 で研究背景について説明し，3 で調査Ⅰについて，4 で調査Ⅱについて述べ，5 で考察を行った後，最後の 6 で，現在の状況と今後の取り組みを示す。

2. 研究の背景

本稿で述べる「総合日本語 5」および「総合日本語 6」科目の位置づけを明確にするため，ここで，CJL で開講されている日本語科目について簡単に述べる。

まず，CJL では日本語科目を「総合科目群」と「テーマ科目群」に分けて設けており，前者は，四技能をバランスよく学習し（漢字科目を除く），定められたシラバス¹⁾と教材で教えるという安定性が重視されている。一方，後者は，各科目の担当教員が作成したシラバスに基づき，テーマに沿った特色ある教育を目指すという先進性が重視されている。また，学習者の多様性と主体性を尊重するという方針の下，学習者は両科目群の中から自身にとって必要な科目を選択し，組み合わせるなどして履修している。

「総合日本語 5」および「総合日本語 6」科目は，前者である「総合科目群」の中に位置づけられ，「総合日本語 5」は中上級レベル，「総合日本語 6」は上級前半レベルとされている。この両科目では，主教材として『留学生のための時代を読み解く上級日本語第 2 版』（スリーエーネットワーク）を使用し，本文の読解を通して社会問題を考え，レポートを作成することが主な内容である。しかし，前述の「総合科目群」の特性を考えた場

合、両科目のシラバスには偏りがあるのではないかという点が、筆者らがコーディネーターとしても授業担当者としても抱いていた問題意識である。これについては、学習者のことを考えた場合も同様で、四技能をバランスよく学べる科目であると認識して履修した場合、その期待や目的が達成されにくくなることが懸念された。

そこで、筆者らはCJLにおける両科目のシラバス見直しのために、実際に授業を履修した学習者を対象として、何を学んだのか、また、何をもっと学びたかったのか、という認識を自己評価の形式で捉える調査を実施した。その結果の分析と考察を通して、両科目の課題を明らかにし、その後の取り組みについて述べたいと思う。

3. 調査 I の概要

3-1. 実施概要

調査 I は 2015 年 7 月の春学期末に、筆者らが担当する両科目（「総合日本語 5」の 3 クラス、「総合日本語 6」の 3 クラス）を受講した学習者のうち、調査協力に同意してくれた学習者を対象に、授業時間外の時間を使って実施した。手順としては、調査趣旨等を説明した上で、質問紙によるアンケート調査を行った。最終的には、71 名からの有効回答を得た。

調査は A4 用紙 3 枚からなり、うち 1 枚はフェイスシート、残り 2 枚が選択式（複数回答可）の質問紙となっている。質問紙の内容は、以下に示すとおり、(1) 文法・語彙（ことば）・表現、(2) 書くこと、(3) 話すこと、(4) 読むこと、(5) 聞くこと、の 5 つの項目を立て、それぞれに下位項目（計 39 項目）を設けた。質問紙の 1 枚目では、「今学期、この授業で勉強したと思うことに ☒ してください。」という指示文を出し、質問紙の 2 枚目では「今学期、この授業でもっと勉強したかったと思うことに ☒ してください。」という指示文を記載した。

3-2. 調査 I の結果

調査 I の結果は、「授業では勉強しなかったが、自分は勉強したかった」と解釈できる回答数、すなわち、質問紙 1 枚目にはチェックを入れていないが 2 枚目にチェックを入れていた回答数を取り上げ、項目別に分析した。主な結果としては、調査項目 (1) 文法・語彙・表現では「書ける漢字を増やすこと」「ことわざ・慣用句」などの授業で扱っていない項目の回答数が多く、日本語レベルの高まりと共に、表現の幅を広げる必要性を感じていることが示された。調査項目 (2) 書くことは、構成や文体、引用の仕方については学んだと認識している一方、段落内の文の配置や各段落のつなぎ方は習得しきれていないという実感があることが窺えた。調査項目 (3) 話すことは、表 1 の回答率に示すように、全般的に回答数が多く、アカデミックなプレゼンテーションの仕方および、話し合いでの伝え方やその表現、目上の人とのやりとりで役立つ表現などに対する要望が高かった。調査項目 (4) 読むことでは、読み物のジャンルとして「小説」を扱ってほしいという回答が多かった (39%) ほか、「読解ストラテジー」の習得も望まれていた (30%)。調査項目 (5) 聞くことは、「ニュースの聴解」を選択した学習者が 46% おり、「聴解ストラテジー」の学習を希望する学習者も 24% いた。

表 1 調査Ⅰ 質問紙での調査項目

項 目		下 位 項 目	回答率 (%)
(1) 文法・語彙・表現		ことわざ・慣用句	27
		書ける漢字を増やすこと	27
		オノマトペ (onomatopoeia)	18
		読める漢字を増やすこと	13
		新しい文法 (中上級～)	10
		新しい語彙 (ことば) の意味と使い方	6
		文法の復習 (～中上級)	6
(2) 書くこと		段落の中の構成を考えること	18
		レポートに合った語彙や表現を使って、書くこと	17
		段落の間のつながりを考えること	14
		事実と意見を分けて書くこと	10
		引用の仕方	4
		レポートの構成 (序論, 本論, 結論)	1
		レポートに合った文体で書く (だ・である体) こと	1
(3) 話すこと	【発表】	発表に対する質問の仕方	28
		発表のとき使う表現	27
		質問に対する答え方	25
		要点をまとめて話す方法	21
		パワーポイントの作り方	8
		レジュメの作り方	1
	【話し合い】	抽象的な物事について説明する方法	24
		相手の気持ちを考えて意見を言ったり, 質問したりする方法	14
		理由を示しながら, 自分の意見を言う方法	13
	【日常生活】	説明したり, 意見を言ったりするとき, わかりやすく伝える方法	7
		あらたまった話し方	28
		発音・アクセント・イントネーション	28
(4) 読むこと		くだけた話し方	11
		読解ストラテジー (Strategy for Better Reading)	30
		要約	15
		中心文やキーワードの見つけ方	10
	【ジャンル】	教科書の本文の読み方	7
		小説の読解	39
		新聞記事・新書の読解	28
		さまざまな話題について書かれた文章の読解 (社会的な話題以外)	20
		社会的な話題について書かれた文章の読解 (教育, 環境など)	3
(5) 聞くこと		ニュースの聴解	46
		聴解ストラテジー (Strategy for Better Listening)	24
		アカデミックな発表の聴解	23
		ディクテーション	11

以下、表1にある調査項目(1)～(5)について、下位項目の回答率に触れながら、調査結果を記述していく。

3-2-1. 調査項目(1) 文法・語彙・表現

語彙については、「語句ノート」の冊子で語彙の確認を行っているためか、6%と回答は少なく、文法に関しては、中上級までの復習を望む回答が6%、さらには中上級以上の文法が学びたいという学習者が10%いた。漢字は授業では特に扱っていないこともあり、「読める漢字を増やすこと」は13%、「書ける漢字を増やすこと」は27%いた。同じく27%の回答があったのが「ことわざ・慣用句」である。「ことわざ・慣用句」は授業内容として扱っていないが、中上級レベルでは、表現の幅を広げる段階にあることから、関心が高いと考えられる。同様に、授業で扱っていない「オノマトペ」も18%と比較的多い回答が見られた。

3-2-2. 調査項目(2) 書くこと

「レポートの構成(序論、本論、結論)」および「レポートに合った文体で書く(だ・である体)こと」の回答率が1%と低く、「序論・本論・結論」という三部構成や文体、引用の仕方については理解できた、あるいは授業で学んだと認識していることがわかった。一方、実際のレポート執筆にあたっては、「段落の中の構成を考えること」および「段落の間のつながりを考えること」の回答率がそれぞれ18%と14%と低くないことから、段落内の文の配置や各段落のつなぎ方で習得しきれていないという自覚があると考えられる。また、具体的な語彙および表現の選択等でも、さらに学びの余地があると感じていることも窺えた。

3-2-3. 調査項目(3) 話すこと

他の項目に比べ、2割前後の回答率が多く見られることから、全般的に話すことに対する要望が高いことが窺える結果となった。「発表」については、発表資料の作成についての希望は多くなく、「発表に対する質問の仕方」などが28%であることから、アカデミックなプレゼンテーションのテクニックを習得したいと考えている学習者が多いことがわかる。「話し合い」については、「抽象的な物事について説明する方法」(24%)が最も多く、「相手の気持ちを考えて意見を言ったり、質問したりする方法」(14%)、「理由を示しながら、自分の意見を言う方法」(13%)と続いている。話し合いという活動は授業の中でかなりの時間をあてているにもかかわらず、話し合いで用いる表現や伝え方については指導していないためであると考えられる。また、「日常会話」は授業でまったく扱っていない内容である。中でも、「発音・アクセント・イントネーション」と、「あらたまった話し方」、すなわち目上の人とのやりとりといったコミュニケーションの学習への要望が28%と高かった。

3-2-4. 調査項目(4) 読むこと

多かった回答は、授業で扱っていない「小説の読解」(39%)と「読解ストラテジー」

(30%)であった。「新聞記事・新書の読解」と回答した学習者もいたが、これは、主教材で扱われてはいたが、部分的に切り取っているため、新聞記事や新書から抜き出されていることをあまり認識していなかったためだと考えられる。また、教科書で扱われているテーマが偏っていたため、「さまざまな話題について書かれた文章の読解（社会的な話題以外）」という回答が20%を占めていた。このことから、扱う話題の多様性が望まれていると推察される。

3-2-5. 調査項目 (5) 聞くこと

「ニュースの聴解」を勉強したいと感じていた学習者が全体の46%を占め、「読解ストラテジー」同様、「聴解ストラテジー」の学習を希望する学習者も24%いた。また、「アカデミックな発表の聴解」に対するニーズも23%に上っており、このレベルの学習者はアカデミックなプレゼンテーションを聞く機会も多いと予想される。

以上のように、調査Ⅰでは当該授業を履修した学習者を対象に、何を勉強したのか、また、何をもっと勉強したかったのかについての認識を問う調査を行い、「授業では勉強しなかったが、自分は勉強したかった」という回答に焦点をあてて、学習者の要望を捉えた。

4. 調査Ⅱの概要

4-1. 実施概要

調査Ⅱは、2015年10月と11月の授業時間外に、調査の趣旨を説明し調査協力者の同意を得たうえで、インタビュー調査を行った。インタビューの際にはICレコーダーで録音した。調査協力者は、調査Ⅰの協力者のうち、特徴的な回答をした学習者4名を対象とした。調査協力者Aは39項目中、「勉強したこと」が5項目未満と少なく、また「勉強したこと」と「もっと勉強したかったこと」の差があった。調査協力者Bは「勉強したこと」と「もっと勉強したかったこと」共に10項目以上あった。調査協力者CとDは「勉強したこと」が14項目と多く、さらに、「もっと勉強したかったこと」が、それぞれ20項目、19項目と多かった。以上の調査協力者に対して、主に履修理由、履修前の両科目への期待と履修後の評価、総合科目群に対する認識について半構造化インタビューを行った。インタビュー項目は表2の通りである。

表2 インタビュー項目

(1)「総合日本語 5」「総合日本語 6」を履修した理由は何か。
(2) どのようなことが学べる科目だと思っていたか。
(3) 一番勉強になったことは何か。
(4)「総合日本語 5」「総合日本語 6」でもっと扱ってほしかったと思うことは何か。
(5)「総合日本語」科目はどのような科目だと思っているか。
(6)「総合日本語 5」「総合日本語 6」について、自身の感想及びクラスメートなどから聞いた声（ニーズや不満等）。

4-2. 調査Ⅱの結果

表2のインタビュー項目にしたがって、調査協力者の主なインタビュー結果を以下に記述する。なお、各回答の末尾の（英字）は調査協力者を示す。

- (1) 「総合日本語 5」「総合日本語 6」を履修した理由は何か。
 - ・学習が継続している感じがする。(A)
 - ・N1を取るのに役に立つと思った。(B)
 - ・レポートの書き方、読解、文法などを総合的に学べる。(C)
 - ・総合日本語科目を順番に取っている。(D)
- (2) どのようなことが学べる科目だと思っていたか。
 - ・(6レベルは) 5レベルとほぼ変わらないと聞いていた。ただ、「書くこと」が学べる授業だと思っていた。(A)
 - ・「文を読むこと」や「書くこと」。(B)
 - ・レポートの書き方や読解や文法など。(C)
- (3) 一番勉強になったことは何か。
 - ・レポートを書くこと。(A)
 - ・文章を読むこと。(B)
 - ・レポートの書き方。(C) (D)
- (4) 「総合日本語 5」「総合日本語 6」でもっと扱ってほしかったと思うことは何か。
 - ・学生同士ではない日本語のチェック。(A)
 - ・会話の練習。(B)
 - ・発表の練習。(C)
 - ・話す機会。(D)
- (5) 「総合日本語」科目はどのような科目だと思っているか。
 - ・四技能を学ぶ科目。(A)
 - ・「総合日本語 5」と「総合日本語 6」は書くことと読むこと。(B)
 - ・先生に助けてもらえる。(C)
 - ・先生が学生を覚えていてくれる。(C)
 - ・四技能を全部勉強する。(C) (D)
- (6) 「総合日本語 5」「総合日本語 6」について、自身の感想およびクラスメートなどから聞いた声（ニーズや不満等）
 - ・聴解については新聞、記事、インタビューなどを入れてほしい。(A)
 - ・少子化や教育の問題はいきなり意見を求められても外国人にとっては難しい。(A)
 - ・レポートのテーマが難しすぎる。(B)

- ・もっと新しい文法を勉強したかった。(B)
- ・JLPT 対策で文法の使い方を教えてくれるといい。(C)
- ・「総合日本語 6」はレポートが3つあるため大変だ。(D)
- ・社会問題を学んだあとで、関連するニュースを見たり聞いたりしたい。(D)

以上のように、インタビュー項目 (1)「『総合日本語 5』『総合日本語 6』を履修した理由は何か」に対しては、総合日本語科目であるからという理由で、継続して履修する学習者が少なくないことがわかった。インタビュー項目 (2)「どのようなことが学べる科目だと思っていたか」では、「6 レベルは 5 レベルとほとんど変わらない」「『文を読むこと』・『書くこと』が多い」など、履修前から学習者間の情報交換で科目に対する知識があり、履修前の科目への期待は比較的低かった。インタビュー項目 (3)「一番勉強になったことは何か」のうち、特にレポート活動に関しては、レポートの書き方は学べたという意見がある反面、活動の進め方については、話し方の指導が不十分であることや、学習者同士の取り組む姿勢の違いに関連した批判的な意見もあった。インタビュー項目 (4)「『総合日本語 5』『総合日本語 6』でもっと扱ってほしかったと思うことは何か」に関しては、発表や話す機会を求める意見があった。インタビュー項目 (5)「『総合日本語』科目はどのような科目だと思っているか」では、授業内容に関しては四技能を学ぶ科目であること、「総合日本語 5」および「総合日本語 6」は読むことと書くことが多いことに言及した。さらに授業が 2 コマ連続であることで、日本語の環境に浸れることや教師が固定されていることを評価する声もあった。インタビュー項目 (6)「『総合日本語 5』『総合日本語 6』について、自身の感想およびクラスメートなどから聞いた声（ニーズや不満等）」では、主に聴解、読解、文法に関する意見が聞かれた。まず、聴解に関して、「新聞、記事、インタビューなどを入れてほしい」や「社会問題を学んだあとで、関連するニュースを見たり聞いたりしたい」という要望があった。読解に関しては、少子化や教育問題について意見を求められることへの負担感や読解文をレポートの題材にすることへの抵抗感が語られた。文法については、より難しい文法の学習や JLPT を睨んだ文法説明への要望が高かった。

5. 調査 I と II の考察とまとめ

本調査により、「総合日本語 5」および「総合日本語 6」両科目双方の内容の重なりや、アカデミックな表現技法や、聴解の扱いが不十分であるといった課題が浮かび上がった。

まず、両科目の内容の重なりについて述べる。「総合日本語 5」および「総合日本語 6」では、同じ主教材を使用している。本教材は、「生活」をテーマとする 1 課～5 課、「少子高齢社会」をテーマとする 6 課～10 課、「教育」をテーマとする 11 課～14 課、「企業と労働」をテーマとする 15 課～19 課、「科学技術と人間」をテーマとする 20 課～22 課、「自然環境・科学技術と人間社会」をテーマとする 23 課～26 課で構成されている。両科目は学習課の重なりはないものの、「総合日本語 5」では 10 課を、「総合日本語 6」では 6 課を授業で扱っており、「テーマ」の重なりがある。両科目とも複数回のレポート執筆活動がシラバスに組み込まれているが、学習課からテーマを選択しレポートを執筆する。こ

のため「総合日本語5」の履修後、「総合日本語6」を履修した場合、似通ったテーマでレポートを執筆するか、レポートのテーマ選択肢が狭まってしまうことになる。また、調査Ⅰの「読むこと」で指摘されているように、「さまざまな話題について書かれた文章の読解（社会的な話題以外）」が求められたことも、同一の主教材の使用が要因の一つと考えられる。さらに、両科目はシラバスの構成も類似点が多い。具体的には、授業の流れとして、語句の予習クイズ、文型・表現の学習、本文読解、当該の社会問題についてのディスカッション等、教材の各課の構成面からも類似性が高いと考えられる。調査Ⅰの「文法・語彙・表現」セクションでは、表現の幅を広げるような内容が求められており、両科目の重なりを解消する意味でも、テーマの分散化による語彙のバラエティーや、表現の多様性が求められていると言えよう。

「総合日本語5」および「総合日本語6」では、授業内で学習者同士が話し合う時間を設けている。しかし、調査Ⅰの「話すこと」にあるように、どのように話すのかについて、授業内で扱っておらず、学習者からの要望が高くなったと考えられる。また、発表の機会も設けられているが、十分なアカデミック・プレゼンテーション・スキルは扱っていない。限られた時間数の中ですべてを扱うのは困難であるが、両科目の履修者が中上級・上級前半レベルとなり、場面に応じた話し方ができることへの渴望が窺える。

聴解に関しては、主教材にCDが付属しておらず、また、シラバスに聴解の時間を設けていなかったことから、調査Ⅰおよび調査Ⅱにおいて、聴解への要望が上がったと推察される。学習者は大学の学部や大学院の授業で、日本語で行われている授業に参加する機会もある。こうしたことから、教師やクラスメート以外の日本語を聴く機会を設けることは学習者にとって有意義であろう。また、主教材で社会問題を扱うことから、関連したニュースを聴く活動を取り入れることも視野に入れることができる。

このように学習者の振り返りから、「総合日本語5」および「総合日本語6」の授業内容の重なり、アカデミックな表現技法の習得や聴解の時間の確保など、課題が浮かび上がった。反面、時間を多くかけているレポート活動については、調査Ⅱでも役に立ったこととしてレポートが挙げられている。限られた時間数の中で、学習者からの要望をすべて叶えることはもちろんできないが、総合科目群の科目として四技能をバランスよく学習できるということを掲げているのなら、四技能のバランスと共に、「総合日本語5」と「総合日本語6」の重なりを解消を検討すべきであろう。

6. 現在の状況と今後の課題

調査で明らかとなった主な問題点は、四技能のバランスの偏り、および両科目双方の内容の重なりである。これら問題点については、調査後から現在に至るまで改善に努めてきた。現在、「総合日本語5」および「総合日本語6」の両科目とも、聴解と個人発表の時間を設けている。但し、両科目の内容の重なり元となっている主教材に関しては、見直しを含め検討中である。

今後も四技能のバランスに留意しつつ、「総合日本語5」および「総合日本語6」が、よりよい科目となるよう考えていきたい。

注

- 1) 本研究では、学習項目に加え、コースデザインの要素も含むことばとして使用する。

参考文献

- 年度報告「第 6 回言葉の／言葉による教育を考える」シンポジウム資料（2015）『早稲田日本語教育実践研究』第 3 号，65-72，早稲田大学日本語教育研究センター。
- 宮原彬（2012）『留学生のための時代を読み解く上級日本語第 2 版』スリーエーネットワーク。

（とくま はるみ，早稲田大学日本語教育研究センター）

（いとう なつみ，早稲田大学日本語教育研究センター）